

幼児保育者及び保護者の 語彙ジェンダー規範の傾向と揺れ

— 品詞別語彙アンケートとインタビュー調査をもとに —

渡辺 倫弥・柴田 冴

1. 研究の背景と目的

近年、多様性や受容性への認識不足を要因とする日本の社会課題が顕在化し、ジェンダーギャップ指数は是正されない。固定的なジェンダー思想は言語を通じ教育にも根強く反映され、藤田（2004：343）は幼児は大人やメディアなどとの交渉の中で自らもジェンダー構築しているとし、幼児期のジェンダー教育の重要性を述べている。幼児に関連する日本語ジェンダー研究には、絵本のジェンダーバイアスはことばにも存在し、こどもが絵本からジェンダー規範を学んでいることを指摘した佐竹（2019：66）、保育環境と保育者のジェンダー観にどのようなジェンダーバイアスが存在するかを明らかにした金子・青野（2008：371）等があるが、幼児保育者、保護者双方を対象とし、品詞別で語彙のジェンダー規範意識に着目した研究は管見の限り見当たらない。

そこで、本研究は言語による社会化の開始時期にある幼児の日常的なやり取りを担う幼児保育者及び保護者が、特定の語彙に対してどのようなジェンダー規範意識を持っているか明らかにすることを課題とした。

2. 調査概要・分析方法

調査は東京都と埼玉県の6つの保育施設に依頼し、保育士47名、保護者60名よりアンケートの回答協力を得た。アンケートは幼児期の保育環境で頻出する各品詞15の語彙に対する性別イメージを5段階で選択する形式で実施した。さらに、アンケート調査後に承諾の得られた協力者に一人1時間程度の

事後インタビューを行い、アンケートからは採取しきれない潜在的なジェンダー規範意識を掘り下げた。分析は、保育士のジェンダー意識が園児の個人マーク選択に影響を与えることを示唆した神田・河合（2008：36）で用いられた5件法を性別イメージ得点に換算した方法を援用した。各語彙に対して、女兒が想起される場合は5、どちらかと言えば女兒は4、男児・女兒両方は3、どちらかと言えば男児は2、男児が想起される場合は1と換算した。

3. 結果と考察

保育者と保護者の規範意識はほぼ共通していた（表1）。名詞語彙のうち保育現場で個人識別マークとして頻用される「リボン」「チューリップ」「さくらんぼ」は女兒、「きょうりゅう」「のりもの」「カブトムシ」は男児にジェンダー規範意識が顕著に表れ、色調や幼児向け商品に用いられるプリント素材の多寡を選択理由とする傾向が見られた。また、幼児期に取り組むことの多

表1：品詞別語彙アンケート調査結果（性別イメージ得点上位・下位4種）

1. 名詞（マーク）

保育者	保護者
リボン	4.34
うさぎ	3.62
チューリップ	3.62
さくらんぼ	3.60
ライオン	2.21
カブトムシ	1.98
のりもの	1.87
きょうりゅう	1.79

2. 名詞（遊び・活動）

保育者	保護者
ビーズ	4.00
おもまごと	3.64
ピアノ	3.55
歌	3.45
鬼ごっこ	2.70
ブロック	2.45
空手	2.19
戦いごっこ	1.60

3. 形容詞・形容動詞

保育者	保護者
かわいい	3.66
おしゃべり	3.43
ていねい	3.36
やさしい	3.13
強い	2.55
たくましい	2.38
乱暴	2.32
かっこいい	2.19

4. 動詞

保育者	保護者
話す	3.26
手伝う	3.23
聞く	3.23
気づかう	3.23
飛ぶ	2.72
走り回る	2.43
蹴る	2.17
殴る	2.04
話す	3.50
片づける	3.40
手伝う	3.40
聞く	3.23
走り回る	2.40
飛ぶ	2.35
蹴る	2.08
殴る	1.97

い活動や習い事を示す語彙の中では「ビーズ」「おままごと」は女兒、「戦いごっこ」「空手」は男児にジェンダー規範意識が特出し、インタビューからは協力者自身の保育環境や身近な事例を傾向化したジェンダー規範意識による選択を理由としていたことが分かった。一方、「おままごと」「塗り絵」には現在の保育や育児経験を通じた規範意識の変容が複数語られた。幼児の性質を表す形容詞、形容動詞については「かっこいい」「乱暴」「たくましい」は男児に偏重し、動詞では「殴る」「蹴る」「走り回る」といった動作性や攻撃性の含有する動詞を男児に選択する傾向が見られた。

4. まとめと今後の課題

インタビュー回答では形容詞、形容動詞、動詞は幼児個人の気質・特性により男女差がないと述べながらも、一般的なジェンダー規範の影響を受け、アンケートでは多数派と思われる性別を回答している様子もうかがえた。また、インタビュー中「ピンクは女の子の色」「男の子は青、水色」といったジェンダー規範に基づいた幼児本人の発言事例が複数確認され、清水(2003: 94)の幼児の色彩選好と保育者のジェンダー規範意識の相関関係とも一致が見られた。本研究の結果から、保育者及び保護者の語彙に対するジェンダー規範意識には一定の傾向があると考えられる。また、一部の語彙には性別イメージを持っているものの、保育や育児経験を通して言語意識のゆれ、変容があることが明らかになった。今後は本研究で十分に採取できなかった世代や男性保育者、保護者への調査を拡大し、幼児に関わる人材の日本語ジェンダー規範意識の傾向や特徴の分析をさらに深めたい。

[引用文献]

- 金子省子・青野篤子(2008)「ジェンダーの視点で捉えた保育環境と保育者のジェンダー観」『日本家政学会誌』59(6), 363-372.
- 神田直子・河合麻紀(2008)「保育者の男女児への個人マーク選択とジェンダー意識——隠れたカリキュラムと表明された意識——」『心理学』29(1), 33-44.
- 佐竹久仁子(2019)「絵本の教えることばのジェンダー規範」『ことば』40, 54-71.
- 清水隆子(2003)「幼児の色彩選好と親のジェンダー意識：ピンク色選好にみられるジェン

幼児保育者及び保護者の語彙ジェンダー規範の傾向と揺れ（渡辺 倫弥・柴田 冨）

ダー・スキーマ』『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』11(1), 87-95.

藤田由美子（2004）「幼児期における「ジェンダー形成」再考——相互作用場面にみる権力関係の分析より——」『教育社会学研究』74, 329-348.

（わたなべ ともみ・元淑徳大学留学生別科専任講師）

（しばた さえ・元東京国際大学専任講師）